

『キーワードで選んで目指せ！課題クリア！』

～おとなの課題図書 2022～

図書館員からのお薦めの図書です。
本は、どんなときも様々な世界への扉を開きます。

〔三島市立図書館 コメント一覧 全 29 冊〕

1 エジプト

①『古代エジプト解剖図鑑』

近藤二郎／著 エクスナレッジ 242.03

ピラミッドを築いた王、ピラミッドの分布、ミイラのつくりかた、ヒエログリフの読みかたから、古代エジプトのファラオ、王墓、神殿、神々、生活など古代エジプトをイラストとともに解説しています。美しい建築物や煌びやかな装飾品、また死後の世界やミイラといった古代エジプトの多方面にわたる謎多き魅力を感じてみませんか。

②『黒いピラミッド』福土俊哉／著 KADOKAWA 913.6 779

③『エジプトの女王』カーラ・クーニー／著

日経ナショナルジオグラフィック社 242.03

2 比べる

①『くらべる東西』

おかべたかし／文 東京書籍 361.42

タイトルの通り、日本の文化や風俗の違いについて比べた本です。東(主に関東)と西(主に関西)での日常で使うものや季節の行事で使うもの、暮らしの違いを写真や文章で分かりやすく解説してくれています。例えば、『犬も歩けば棒に当たる』が東のカルタ、『一寸先は闇』が西のカルタだそうです。幼い頃に遊んでいたカルタにも地域ごとに違いがあるとは驚きでした。

②『くらべる日本 東西南北』おかべたかし／文 東京書籍 361.42

③『ネコライオン』 岩合光昭／著 クレヴィス 489.53

3 整える

①『おやこの薬膳ごはん』

山田奈美／著 クレヨンハウス 493.9

季節ごとに起こりやすい体のトラブルと、そのトラブルの改善が期待できるレシピが紹介されています。「薬膳」というと難しい感じがしますが、その時季の旬のものを主に使った料理で、「これならできそう!」というレシピです。

食で体を整え、トラブルを改善しませんか?

②『整えるヨガ』 廣田なお／著 ダイヤモンド社 498.34

③『整える習慣』小林弘幸／著 日経 BP 日本経済新聞出版本部

B498.3

4 憧れの建築家

①『フランク・ロイド・ライト』

Arlene Sanderson／著 丸善 523.53

美術館のポストカード売り場でみつけたフランク・ロイド・ライトの設計図に一目惚れしたのがきっかけで、建築だけでなくその意匠・家具にはまりました。この本はコンパクトにまとまっていて、近代建築家三大巨匠の1人であるライト入門書として最適です。ただ、残念ながらモノクロなので、他の本や、実物(日本には帝国ホテルがあります。)を是非みて下さい。コルビュジエ、ミースも素敵です。

②『ル・コルビュジエ』

富永譲／著 丸善 523.35

③『ファーンズワース邸/ミース・ファン・デル・ローエ』

後藤武／著 東京書籍 527

5 きもの

①『きもの 365 日』

群ようこ／著 集英社 B593.8

1年間、群さんがほぼ毎日きものを着ることにチャレンジした日記エッセイです。着付けの本には決して登場しないであろう裏技満載です。季節ごとの諸事情も「へーっ」と納得。

きものだけでなくお稽古事など日本文化も身近に感じられます。

礼装と浴衣の間“日常のきもの”。ちょっとのぞいてみませんか?

②『喋々喃々』

小川糸／著 集英社 913.6 117

③『明治・大正のかわいい着物モスリン』

似内恵子／著 誠文堂新光社 753

6 全国のお菓子

①『ふるさとの菓子』

中村汀女／著 アドスリー 596.65

半世紀前(昭和 30 年)に発行された幻の名著。全国の銘菓を俳句と美しい日本語で紹介する。

「菓子と人がみな故郷を持ち、思い出を持っている。この本はそうした多くの『菓子への恋文』である。」 —中村汀女—

関連本に挙げた書籍とあわせ、居ながらにして全国のお菓子めぐりをお楽しみください。

②『福を招くお守り菓子』溝口政子・中山圭子／著 講談社 383.81

③『にっぽん全国おみやげおやつ』甲斐みのり／著 白泉社 596.65

7 ピクトグラム

①『世界ピクト図鑑』

児山啓一／著 ビー・エヌ・エヌ 727

「ピクトグラム」は、少し外を歩くだけでたくさん見つけることができます。面白く擬人化された図もあれば、シンプルに表現された図もありますが、共通しているのは言葉が通じなくてもそのピクトグラムを見れば意味が伝わる、そんなデザインです。

この本は場所や国によってもデザインが異なるピクトグラムを一覧で紹介しているので、見比べて楽しむことも出来ます。

②『マークの秘密がわかる本』

全国素朴な疑問研究会／編著 日東書院本社 727

③『ピクトグラフィ・ハンドブック』

Rudolf Modley／著産調出版 727

8 身近な文字や言葉

①『もじもじ探偵団』

雪朱里／著 グラフィック社 727.8

普段何気なく目に入ってくる様々な字体、気になりませんか?字体を見るとその物を思い浮かべるような、長く変わらず使われているものもあります。

身近にあるナンバープレート、道路、お札などの文字がどのように作られたか、歴史や変遷を知ることができる 1 冊です。

②『日本語の大疑問』

国立国語研究所／編 幻冬舎 810.4

③『知っておくと役立つ街の変な日本語』

飯間浩明／著 朝日新聞出版 810.4

9 折り紙

①『脳が目覚める実用大人の折紙』

川島隆太・小林一夫／著 きこ書房 754.9

考えて工夫することは、人だけに許されたとても高度な機能です。折紙は脳を刺激し、集中力や創造力が養われます。貴方も折ってみませんか。

②『活発脳をつくる60歳からのおりがみ』

古賀良彦／監修 主婦の友社 754.9

③『折らないオリガミ BOOK』

ingectar - e／著 インプレス 754.9

10 村上春樹インスパイア

①『オーデュボンの祈り』

伊坂幸太郎／著 新潮社 B913.6 1冊

インタビュー等の裏付けはありませんので、独断で選定しています。『オーデュボンの祈り』は読後に村上春樹氏の『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』を連想しました。どちらも作中に2つの舞台が存在し、話が進んでいきます。終盤に2つの舞台は徐々にフラッシュバックしていきクライマックスを迎えます。「世界の終わり」と「萩島」、「一角獣の頭蓋」と「カカシの頭」。まだの方は2作とも面白いエンタテインメント傑作なので読んでみてください。読後に2作の共通部分を理解してもらえると幸いです。

②『ピアノシモ』

辻仁成／著 集英社 B913.6 2冊

③『海峡の光』

辻仁成／著 新潮社 913.6 2冊

11 小説で読む「認知症」

①『わが母の記』

井上靖／著 講談社 913.6 1冊

まだ「認知症」という言葉が使われていなかった頃、呆けて次第に現実から遠ざかっていく母の姿を、小説家の冷静な観察眼と息子の複雑な感情の両面から、丹念に綴っています。小説というフィクションの形を取ってはいますが、実体験に基づくと思われる描写は、小さい頃の生い立ちによる母への恨みとうらはらに、老いていく母への愛情が感じられ、切ない気持ちにさせられます。

②『長いお別れ』

中島京子／著 文藝春秋 913.6 1冊

③『私が誰かわかりますか』

谷川直子／著 朝日新聞出版 913.6 2冊

12 はじめの一步

①『万事オーライ』

植松三十里／著 PHP 研究所 913.6 1冊

地元の反対・資金不足など様々な困難に遭うも、仲間や妻とともに別府を日本一の温泉地へと導いた物語です。

温泉だけでは人は集まらないことがわかると、「地獄巡り」と名を付け、なおかつバス会社を設立するなど、困難に出会うたびに試行錯誤を重ねていきます。ここでも渋沢栄一の名が登場します。

別府に行ったことがある人もない人も、この事実を知っていると見る目が変わることでしょう。

②『黄金の刻(とき)』

楡周平／著 集英社 913.6 2冊

③『道をたずねる』

平岡陽明／著 小学館 913.6 1冊

13 宇佐見りん

①『かか』

宇佐見りん／著 河出書房新社 913.6 1冊

日々、数百冊の本の返却作業をする中で、グッとくる表紙がたまにある。泣き崩れる女性が描かれている本のタイトルは「かか」だ。気になりつつ日々を過ごしているうちに、第2作「推し、燃ゆ」で芥川賞を受賞したのが、宇佐見りんさんだ。同じ時代、風景を共有していると思うことは作品に入る角度を変えてくれる。宇佐美さんを推しています。

②『推し、燃ゆ』

宇佐見りん／著 河出書房新社 913.6 1冊

③『ベスト・エッセイ 2021』

日本文藝家協会／編 光村図書出版 914.68 1冊

14 グルメ×ミステリー

①『土曜はカフェ・チボリで』

内山純／著 東京創元社 913.6 1冊

現場に行かず、話を聞いただけで事件を解決してしまう探偵のことを、「安楽椅子探偵」と言います。今回はその中でも、謎解きと一緒に美味しい料理を提供してくれる探偵たちの物語を集めました。

こだわりの内装と美味しいデンマーク料理が自慢のカフェ・チボリは、土曜にしかオープンしないちょっと変わったお店。常連さんが身近におきた不思議な出来事を話し始めると、オーナーの謎解きが始まります。

②『タルトタタンの夢』

近藤史恵／著 東京創元社 913.6 1冊

③『花の下にて春死なむ』

北森鴻／著 講談社 913.6 1冊

15 微笑

①『沈黙』

遠藤周作／著 新潮社 913.6 1冊

もし自分が禁教時代のキリシタンだったら、踏絵に足をかけずにいられるだろうか…きっとわたしは、助かるために理想的な生き方を曲げてしまうだろうと思います。

『沈黙』では、踏絵を踏んでしまう弱い人間の姿が描かれています。わたしは自分の弱さと向き合ってみたいと思いこの小説を読みました。主人公の宣教師ロドリゴは、物語の終盤で自分をはやし立てる子どもたちを見て寂しく笑います。弱い者の苦しみを知ったロドリゴの微笑に、あなたは何を見出しますか？

②『シッタールタ』

ハッセ／著 新潮社 B943.7 1冊

③『神神の微笑(芥川龍之介全集 第8巻)』

芥川龍之介／著 岩波書店 918.68 1冊

16 和菓子

①『和菓子迷宮をぐるぐると』

太田忠司／著 ポプラ社 913.6 1冊
理系の大学に通い大学院の進学まで考えていた男の子が、美しい和菓子に会い、和菓子職人をめざすため専門学校での生活へと舵をきり、いろいろな体験をする。創る側面から和菓子の奥深さを感じることができる小説です。ときどき物理の難しい言葉もでてきますが、そこはご愛敬。。。

和菓子を自分で作ろうとまではいかないですが、和菓子の本をみて目の保養をしたり、美しく美味しい和菓子を探したくなります。

②『ときめく和菓子図鑑』

高橋マキ／文 内藤貞保／写真 山と溪谷社 588.36

③『心を届ける。和菓子と暮らしの歳時記』

吉沢久子／著 主婦の友社 596.65

17 怪談

①『営繕かるかや怪異譚』

小野不由美／著 KADOKAWA 913.6 ㊦

作者の小野不由美さんはいろんなジャンルの本を書かれています、取分け怪奇もの、闇の向こうから何かひたひたと近づいてくるような恐怖の書き方がうまいなと思います。

「何が」「どうして」が分からないから恐怖であり、そこを解明してもらえると怖さってちょっと減るのだなと思います。

営繕屋の尾端は怪談に筋道をつけて依頼者の負担を軽くする。

ただ恐怖に震えあがるだけでなく最後に少し救いを感じる物語です。

②『きつねのはなし』 森見登美彦／著 新潮社 913.6 ㊦

③『あやしー怪一』 宮部みゆき／著 角川書店 913.6 ミ㊦

18 王の物語

①『月の影影の海 上・下』

小野不由美／著 講談社 913.6 ㊦

女子高生の陽子の下に謎の男「ケイキ」が現れ、何もわからぬまま主従の誓いを結んでしまう。異形の獣たちに襲われ、異世界に迷い込んでしまった陽子は「ケイキ」ともはぐれ、たった一人で孤独な旅を続ける。度重なる試練を乗り越えた先には、何が待つのか…。

『十二国記』シリーズ初期の作品。

②『デルフィニア戦記 1』 茅田砂胡／著 中央公論新社 913.6 ㊦

③『アースシーの風』 ル=グウィン／著 岩波書店 933 ㊦

19 受容

①『青桐』

木崎さと子／著 文藝春秋 913.6 ㊦

乳癌に罹りながら一切の医療を拒み、死と正面から向き合う叔母の姿が、幼い頃に受けた顔の火傷と生い立ちによって澁んでいた姪の心を、静かに再生させていく。約 40 年前に発表された作品だが、容易には受け入れがたい現実を〈受容〉しようとするふたつの心が交差するさまが、姪の視点から細やかに描かれており、改めて胸を打つものがある。第 92 回芥川賞受賞作。

②『おらおらでひとりいぐも』

若竹千佐子／著 河出書房新社 913.6 ㊦

③『でんでんむしのかなしみーいのちのかなしみ・詩童話集一』

北川幸比古・大倉雅恵／編 新美南吉ほか／著
日本短波放送 913.68 ㊦

20 夜道

①『流れ星が消えないうちに』

橋本紡／著 新潮社 913.6 ㊦

恋人である加地を亡くした奈緒子。高校時代に加地と親友になり、奈緒子と加地の傍らで二人の恋人関係を願った巧。二人にとってあまりにも大きな存在であった加地の死以降、二人はその場に立ちすくむような日々を送っています。もう一度歩き出す一歩目を澄んだ空気感で丁寧に描いたお話です。（「流れ星が消えないうちに」）

様々な想いを抱えて夜道を歩くシーンが、時に美しく、切なく、愉快で、温かい。そのようなお話を三冊紹介します。

ぜひ読んでみてください。

②『月のうた』 穂高明／著 ポプラ社 913.6 ㊦

③『太陽の塔』 森見登美彦／著 新潮社 913.6 ㊦

21 ねこ×こども

①『かのこちゃんとマドレーヌ夫人』

万城目学／著 筑摩書房 913.6 ㊦

かのこちゃんは小学 1 年生の女の子です。かのこちゃんの家には、犬の玄三郎と猫のマドレーヌがいます。マドレーヌは玄三郎の奥さんです。かのこちゃんの学校生活やマドレーヌ夫人たち猫の集会でのやりとりがとても楽しく、悲しい別れが近づく日々の場面ではとても切なく泣きそうになります。それでも、かのこちゃんもマドレーヌ夫人も、周りの大人もこどもも犬も猫たちも、誰もがお互いのことを大切に想い合っていて、何度読んでも優しい気持ちで胸いっぱいしてくれるような一冊です。

②『ポニーテール』 重松清／著 新潮社 913.6 ㊦

③『きりこについて』 西加奈子／著 角川書店 913.6 ㊦

22 ひたすら進む

①『夢をかなえるゾウ』

水野敬也／著 飛鳥新社 913.6 ミ㊦

関西弁のゾウの神様＝ガネーシャと夢をあきらめかけたサラリーマンが繰り広げる物語。夢を実現させるための課題は、当たり前だけど、なかなか続かないことばかり。ゆる～い言葉で繰り広げられる 2 人のやりとりはコントそのもの。

想いを遂げる方法をガネーシャから教わり、自分のものにできるのか…。読んでからのお楽しみ。

②『食堂メッシタ』 山口恵以子／著 角川春樹事務所 913.6 ㊦

③『孤篷のひと』 葉室麟／著 KADOKAWA 913.6 ㊦

23 真相

①『ソロモンの偽証』

宮部みゆき／著 新潮社 913.6 ミ㊦

クリスマス未明、中学生の柏木卓也が転落死した。殺人か？ 自殺か？ 疑念が広がる中、同級生の犯行を告発する手紙が関係者に届き、犯人捜しが公然と始まった…。死の真相を求める生徒達を描くミステリー。知れば知るほど考えさせられる。時には時間をかけてじっくりと思考していくことも読書の良さかと思います。

②『高校入試』 湊かなえ／著 角川書店 913.6 ミ㊦

③『山椒大夫・高瀬舟・阿部一族』 森鷗外／著 角川書店 B913.6 ㊦

24 お仕事小説

①『あしたの君へ』

柚月裕子／著 文藝春秋 913.6 ㊦

22 歳の望月大地はこの春、家裁調査官補に採用されて養成課程研修中の身である。実務修習で、少年事件、家事事件を担当していく中で、「この仕事は自分に向いていないのではないか」という気持ちと日々葛藤しながらも、悩みを抱える人たちと真剣に向き合い少しずつ成長していく。

仕事での出会いを通じて自分の価値観を見つめ直す大地を通じて、読者の私たちの価値観も変わっていくのではないだろうか。

②『書店ガール』 碧野圭／著 PHP 研究所 B913.6 ㊦

③『駅物語』 朱野帰子／著 講談社 913.6 ㊦

25 博物館



①『それでも世界は回っている』

吉田篤弘／著 徳間書店 913.6 334

《六番目のブルー》という幻のインクを探すため、ギタリストのおじさんと共に旅に出かけた主人公の少年、オリオ。

博物館で記録作業をしている彼にとって、師匠から受け継いだそのインクは、とても大切な存在だった…。

“幻のインク”を巡るちょっと不思議な物語。

挿し絵のイラストも素敵な作品です。“幻のインク”とは、いったいどんな色なのかとても気になります。

②『ミュージアムグッズのチカラ』

大澤夏美／著 国書刊行会 069.02

③『△が降る街』

村崎羯諦／著 小学館 B913.6 454

26 暮らしを見つめる



①『くらすたのしみ』

甲斐みのり／著 mille books 914.6 41

人は皆、衣食住を営み、働き、学び、遊びなどを繰り返して暮らしている。そんな日々の「暮らし」の中に、自分の楽しみを見つけることが、著者の望む暮らし方だそうです。

静岡県生まれの著者が 55 の他愛ない普通の暮らしの出来事を集めて綴っています。

暮らしは人それぞれで、今日の出来事、明日のこと、今までのこと、これからのことすべてが日常生活の一コマ。どんな暮らしにも正解はない中から、自分らしいことを見つけてみてはいかがでしょうか。

②『日々のものさし 100』

後藤由紀子／著 パインターナショナル 590

③『新しい発酵ごはん』

円居／編 静岡新聞社 596.37

27 奇跡の逆転物語！感動ノンフィクション



①『左手一本のシュート』

島沢優子／著 小学館 916 37

「もう一度バスケットがしたい」

中学時代、山梨県選抜のエースとして活躍した選手を高校入学と同時に襲った大病。右半身麻痺となり、絶望しながらも必死のリハビリと仲間の助けでコートへ戻ってきます。TV 番組でも特集された感動の実話です。

関連の 2 冊も逆境を乗り越えて成功した人たちの実話をまとめた本になっています。

②『紙つなげ!彼らが本の紙を造っている』

佐々涼子／著 早川書房 585.06

③『ローマ法王に米を食べさせた男』 高野誠鮮／著 講談社 318.6

28 混迷 詩情



①『秋』

アリ・スミス／著 新潮社 933 33

舞台は EU 離脱が決まった 2016 年イギリス。介護施設で眠り続ける 101 歳のダニエルの見る夢から物語は始まる。もう 1 人の主要人物、32 歳のエリサベス（エリザベスではない）は大学の非常勤講師で、かつて彼の家の隣人だった…。

スコットランド出身作家による長編で、四季四部作の 1 作目本作から完結編まで、各巻登場人物の人生が描かれ、「秋」「冬」「春」はどの巻から読んでも大丈夫。「夏」は 3 作の伏線回収の役割もあり、最後にお楽しみください。

②『葬送』

平野啓一郎／著 新潮社 913.6 171

③『シヨスタコーヴィチ』

亀山郁夫／著 岩波書店 762.38 37

29 現代ロシア文学



①『ペンギンの憂鬱』

アンドレイ・クルコフ／著 新潮社 983 71

三島市立図書館では外国文学も豊富に取り揃えており、その中から皮肉なことに注目を集めることとなってしまった小説をご紹介します。東欧からロシアにかけての地域で発表される現代文学には、ちょっと不思議な作風で、SF やファンタジーのジャンルに収まり切れない名作がたくさんあります

こちらの作者はレニングラード生まれ。幼い頃キーウに移住し、ロシア語で小説を発表し続けています。

②『巨匠とマルガリータ』ブルガーコフ／著 岩波書店 B983 71

③『親衛隊士の日』

ウラジーミル・ソローキン／著 河出書房新社 983 71